八尾ベースボールクラブの設立(2005年)と活動の展開に関する研究

森本　友

1. 研究の動機

私が高校生のころ初めて社会人クラブチームの存在を知ったが、チームに所属する選手の中には強豪校出身で野球の技術の高い選手もいるわりには知名度が低く、注目されていないと感じた。そこで社会人野球のなかでクラブチームがどのような立ち位置で、どのような役割を果たしているのか興味を持ったことが本研究の動機である。

2. 研究の目的と意義

本研究の目的は社会人野球クラブチームのなかでも大阪府・八尾市に誕生した八尾ベースボールクラブに着目し、誕生の背景と展開について明らかにすることである。長い社会人野球の歴史の中でクラブチームの誕生と盛衰を解明し今後の可能性について模索し、新しい知見をスポーツ史研究に追加できることが意義である。

3. 先行研究の検討

根本(2012)の研究では社会人野球の賛助会費の有無を規定する要因を明らかにしており、社会人クラブチームの資金面に関する研究は見られたが、特定のチームの誕生や展開を述べた研究は見られなかった。

4. 研究の方法

本研究では以下の３つの章に区分して社会人野球クラブチームの誕生と展開について明らかにしていく。第 1 章では初めての社会人チームが成立した 1873 年から 2005 年までの社会人野球を通史的に概観する。第 2 章ではクラブチームの活動が再び活発となる 2000 年代初頭の状況から八尾ベースボールクラブの設立期について扱う。第 3 章では八尾ベースボールクラブの展開についてメンバー構成、大会の結果、社会貢献活動、現状に分け論じていく。扱う史料は日本野球連盟より発行される「連盟史」「都市対抗史」「日本選手権史」「全日本クラブ野球選手権大会史」、NPO 法人八尾ベースボールクラブから発行される「会報夢叶うまで挑戦」、新聞記事やテレビ番組での特集、関係者からのインタビュー、八尾ベースボールクラブのＨＰなどである。

5. 本論

5.1 八尾ベースボールクラブ設立以前の社会人野球

1873 年日本に野球が伝来すると、1878 年新橋駅の鉄道関係者によってつくられた「新橋アスレチック・クラブ」により社会人野球が始まった。大正時代には盛り上がりを見せ実業団チームが続々とできると、東京日日新聞記者である橋戸らの尽力で 1927 年第 1 回都市対抗野球大会が開催された。第 9 回大会まではクラブチームが優勝するが、第 10 回大会には初めて企業チームが優勝すると企業チームとクラブチームが鎬を削る。1949 年の日本社会人野球協会(日本野球連盟の前身)発足後は企業の時代となり、1963 年には企業チームが 237 チームを数え、都市対抗野球大会、日本産業対抗野球大会、社会人野球日本選手権大会出場も独占し、企業全盛時代となる。一方 1976 年にはクラブチーム日本一を決める全日本クラブ対抗野球大会が始まった。1980 年代から企業チームの休部、廃部が目立ち始めると、バブル崩壊の影響もあり、実績あるチームも次々と活動休止となり、2003 年には企業チームが 89 となり全盛期の 3 分の 1 程度にまで減少した。

5.2 第 2 章八尾ベースボールクラブの設立

相次ぐ名門企業チームの活動休止は社会人野球を揺るがしたが、2000 年代前半に

はメジャーリーガー・野茂英雄が理事長を務める「MONO ベースボールクラブ」とタレントの萩本欽一が率いる「茨城ゴールデンゴールズ」の設立によりクラブチームが世間から大きな注目を集めた。これによりクラブチームが全国で急増し、大阪府・八尾市でも教諭として高校野球を 20 年指導したのち住職となった河島博により「八尾ベースボールクラブ」設立へ向けた動きがあった。河島は、以下 2 点「①硬式野球を続けたい若者に活躍の場を与える。『都市対抗野球出場・クラブ選手権優勝』②野球人口の拡大・正しい野球の普及『野球教室の開催・野球大会・講演会の開催』」を設立趣旨とし、メールマガジンやチラシを通してチーム構想などを発信し、多くの人にチームの存在を知ってもらえるよう尽力した。社会人チームは日本野球連盟からの厳しい審査の承認を得て、連盟に加盟する必要があるため、信頼を得て、他のチームと違いを作るため、NPO 法人としての申請をすることとした。また、河島は行政を巻き込むため、八尾市長のもとに面会に行き、名誉顧問へと就任した。こうした懸命な努力と入念な準備のもとプロ野球選手や実業団でのプレー経験もある者を含む 7 名の指導者と、15 歳の高校生から 25 歳の社会人までの学校、職業も異なる 39 名の選手、4 名のマネージャーが集まった。2005 年 10 月 8 日に初練習が行われ、27 名の部員が参加し、翌 11 月 1 日には NPO 法人としての許可が下り、2006 年 2 月 23 日毎日新聞社大阪本社にて行われた大阪府野球連盟「定時理事会・評議会」で加盟が承認され、「八尾ベースボールクラブ（八尾 BC）」としての活動がスタートした。

5.3 第 3 章八尾ベースボールクラブの活動の展開

監督について、初代は河島が務めたが 2 代目の監督以降、河島は総監督を務めている。2 代目・豊田義夫や現監督・江上光治は野球界の著名人で就任の際には複数の新聞に取り上げられた。部員数については、年により前後するが 20 後半から 40 人近くが在籍し、部員の入れ替わりは激しい。また、八尾 BC 出身の NPB 選手には、生山裕人がいる。試合結果については、創設以降目標とする都市対抗野球出場・クラブ選手権には出場できていないが近年 1 次予選の突破や企業チームに二度勝利しており、今後は週末だけの活動である八尾 BC とは異なり、毎日のように練習を行う企業型クラブチームにどう勝つかが課題である。また、社会貢献活動として野球教室と少年野球大会の運営、指導者講習会、東大阪ベースボールフェスティバル、通信制高校との教育提携などを行う。現在は、17 歳から 31 歳までの 32 名の選手と 10 名のチームスタッフが所属している。運営資金はスポンサー企業、賛助個人会員の会費と部費で賄っているが、今後さらに充実した練習環境にするためいかにスポンサーを増やすかがカギとなる。

6. 結論

第 1 章から第 3 章を通し、長い社会人野球の歴史のなかで初期に主役であったクラブチームが、企業チームの活動休止が相次ぐ中で再び注目を浴び、八尾 BC の活動から年齢を問わず何歳になっても、硬式野球をしたい者の受け皿となること、さらに社会貢献活動として野球教室や指導者講習会を行うことや新聞への掲載、テレビ、ラジオへの出演を通し地域に密着し、応援されるチームになることができるといった社会人野球クラブチームの魅力・必要意義を見出すことができた。一方で、運営資金面や、学校、職業がそれぞれちがうことによる練習人数の偏りなどクラブチームならではの難しさもあることがわかった。

（指導教員：秋元　忍）